



◆**連想企画**とは……ヤングスタッフが、好きな「風景画」・「短歌」を選び、その作品からイメージするものや、どのような状況で描かれた・詠まれたものなのか背景等を考え、新しく物語を創り出す企画です。

はじめての試みでしたが、今回は5作品ができあがりしました。

どんな風景画・短歌から創られた物語か、ぜひ想像してみてください。

◆ある風景画からの連想 1

夜道を歩いていたら、温かい光と珈琲の香ばしい香りが漂ってきた。

今日は仕事もなかなか終わらず、一人寂しく帰っていた所で、カフェテラスから漏れる光は苛ついていた自分の心をじんわりと温めてくれる。白く吐く息も心なしか色が薄くなったような気がする。一瞬前まで家に帰りたい気持ちでいっぱいだったのに。今夜は少し寄り道することにした。

P.N. Jade



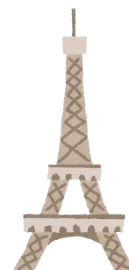
Illustrated by Jade の友人

◆ある風景画からの連想 2

フランスの建国を称えるお祭り、通称パリ祭り。昼間の大通りにはたくさんの人が集まって、喜び称え合う。そんなお祭りも昨日で終わり、今日はみんな家で休んでいるらしい。会話をする相手もなく、ただ黙々と祭りの余韻を感じながら歩く。

しばらく歩いていたら、二人の笑い声が聞こえた。静かだからよく響いていた。とても、とても楽しそうで、今もまだお祭りが続いているのではないかとも思わせる。祭りに間に合わなかった恋人との逢瀬を楽しんでいるのだろうか。

P.N. Jade



◆ある風景画からの連想 3



「夜にお空を見上げてはいけないよ」

この町の大人は皆、口をそろえてこう言う。なんでも夜空には不思議な力が宿っており、それを見た者を魅了させて連れ去ってしまうのだそうだ。だからこの町の人々は太陽が沈む前に帰り、再び昇るまで家に閉じこもってしまう。どうしても外に出る必要があるときは下を向いて歩くのだ。

僕も一度、妹が夜に熱を出してしまったときに薬屋のおじさんの家に行くために夜道を歩いたことがある。もちろん下を向いて歩いたのだが、そのときの不思議な感覚は今でも忘れられない。普段は人々の話し声やどこからともなく聞こえてくる音楽でにぎやかなのに、しんと静まり返ったこの町の中をひとりで進んでいく高揚感。しかも夜は暗いはずなのに、空から何かで照らされているようにはっきりと浮かんだ影。この影はなんだろう。夜の空には何があるのだろうか。まるで別の世界へと迷い込んでしまったような感覚と夜の空にある得体の知れないものに対する知的好奇心は、僕の中にしっかりと刻み込まれた。

それからというもの、僕は夜空について調べ始めた。大人たちに気付かれてはいけないから、こっそりと町の外れにひとりで住んでいる変わり者のおじいさんに話を聞きに行ってみたのだ。

おじいさんはあまりいい顔はしなかったけれど、何度も頼み込むと渋々、夜空には黄金に光り輝く「月」というものや、ひとつひとつはそこまで明るくはないけれど数えられないほどたくさんある「星」というものが浮かんでいるということを教えてくれた。あの日見た影は月や星の光によるものだったのだ。次々と出てくる初めての存在に目を輝かせながら話を聞いていると、おじいさんは厳しい声で忠告した。

「絶対に見てみようだなんて思うんじゃないよ。一度連れ去られたら帰り道がわからなくなってしまうからね。」

そう言った後におじいさんが少し寂しそうな顔をしていたことには気がつかなかった。

おじいさんの話を聞いてから僕はますます夜空に興味を持った。一度で良いからこの目で見てみたいと思うほどに。いけないことだってわかっているし、おじいさんの忠告も覚えている。

けれども、この衝動を抑えることはできなかった僕は、家族が寝静まった深い夜の中、家の外へと足を踏み出して空を仰いだ。

その瞬間、目に入り込んできたのは光り輝く無数の星々と、そのなかでもひとときわまばゆい光を放つ大きな月。目に映ったその光景に、思わず息をのんだ。美しいなんて、そんな言葉では表せないほど衝撃的なものだった。もっと近くに行きたい。もっと近くで目に焼き付けたい。そんな衝動のままに、僕は町の東にある丘へと走って向かった。

丘にたどり着いた僕は再び空を見上げる。星はちっとも近くはなっていなかった。こんなものじゃ足りない。もっと高いところに行かなければ。どこだ、どこならもっと近づける？そう思いあたりを見渡した僕の目に映ったのはさらに東にある山だった。あそこならもっと近くで星が見られる。にっこりと笑った僕は山に向かって走り出した。

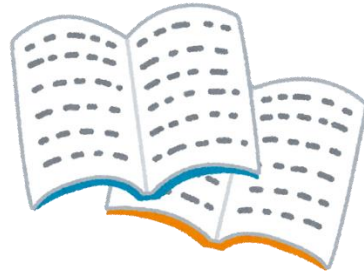
次の日、町ではひとりの少年が行方不明になったという噂が人々の間で交わされていた。

P.N. 菊

◆ある短歌からの連想 1

「りーんか！」

「ひゃっ！」



【バサバサバサバサ】

あー、やってしまった。

先程の授業で回収物を先生に頼まれたので、昼休みにクラスメイト約 40 名のノートを受け取り、職員室へ運ぶ最中、イツメンの女子に背後からいきなり話しかけられ思わずノートを落とした。

話しかけられたと言うよりは軽く後ろからぶつかられたんだけど。

「……やっちゃった」

廊下に散らばるノートに苦笑する。

「ちょ、大丈夫？あ、それでね、うちさあ、次当たるんだけど宿題やってないんだよね」

「そ、そうなんだ……」

「でさ、また見せてくれない？」

大丈夫かと聞きながら一冊もノートを拾わない彼女の、自己中心的な頼み事に少し腹を立てながらも、これを断り彼女の機嫌を損ねる方がこの先の学校生活に悪影響を及ぼすと判断した私は顔面に笑顔を貼り付けて「プリント、カバンに入ってるから見ていいよ」と、簡単に返事をした。

「ありがとう～、後でジュース奢る！」

あいかわらず一冊もノートを拾わず走っていく彼女からの頼み事は今週三回目。決まり文句の「奢る」は守られたことは無い。別に奢って欲しいとかじゃない。する気のない約束を簡単にしないで欲しい。私が反抗をしないとわかっての頼み事なのだ。彼女に嫌われたらこの学校生活が終わることは分かっている。なぜ彼女たちと同じグループにいるのか、自分でも分からないが、きっと彼女を始めとするほかの女子的にも都合が良かったのだ。

何かあったら助けてくれる私は。都合のいい友人だから。先生にチクることも、反抗することもない完璧な友人なのだ。ひっそりと、波も立てず平和に生活して卒業するのを待つ。ずっと、入学してからそうしてきた。

溜息をつきながら一冊ずつ、ノートを拾う。また名前順に並び替えて職員室に届けることを考えると非常にめんどくさい。心の中で悪態をつくが、結局は彼女たちに逆らえない自分にも腹が立つ。とはいえ、この現実には上手く順応するしかないのだ。

先程、私がノートを落とすとわかってさりげなくぶつかってきたのも気づいているんだ。 だけど仕方ないんだ。すべて。彼女に反抗しないよう、良い友達として、彼女の陰に隠れてひっそりと生きているのだから。仲間であるうちは、ひどいいじめには遭わないで済むから。

「おい」

「はい！！」

散らばったノートを集めていて、突然私の目の前に男子生徒が現れた。

「俺の足元まで来たけど」

咄嗟に顔を上げ彼を見上げるとクラスメイトで私の目の前が座席の柗木くんだった。

「あ、ありがとう」

「ん」

彼はクールで冷静。表情の変化は基本しないが、友人と仲が良さそう。女子からも人気でモテているようで、以前たまたま告白の現場に居合わせたこともある。カリスマ的で、気がつけば周りに人がいてキラキラしている。私がなりたい理想像である彼に私は勝手にあこがれ、嫉妬している。ひっそりと生活している私は授業中や彼が友達と話しているところを後ろからこっそり見ては瞼の裏に焼き付けて、あたかも自分がその場の一員であるかのような空気を楽しんだ。現実逃避だ。そもそも彼は私とは真逆なのだ。自分を偽って嘘の友達とつるむ私なんかとは。だから実際私が彼の隣に立つ事などありえない。

彼からノートを受け取ろうと手を伸ばすと彼は少しノートを引っ込めた。

「え？」

彼の行動の意味が理解できず見上げたまま固まる私を見た彼は、私と目線が合うようにしゃがんで「何してんの？」と聞いてきた。

「の、ノートを拾ってます」

「そんなのが聞きたいんじゃない」

彼のその言葉の意味を理解できず、彼を見つめ続けると彼は私にノートを渡して「あんなのが友達で楽しい？」とだけ聞いてきた。

「え……」

「あなた、あいつから宿題見せてって言われるの何回目だよ。俺が見かけただけでもゆうに5回は超えてる。なんで嫌だって言わねえんだよ」

……他の人が気に止めてるだなんて思いもしなかった。周りから見たら私たちは仲のいい友達だと思われてるんだとすら思っていた。

「あんなのは友達じゃないだろう」

「な、何言ってるの？」

「そのまんま」

彼はそう言う私にノートを差し出してそのまま去っていった。

……柊木くんには分からないよ。嫌われないために毎日どれだけ神経すり減らしてグループにいるかなんて。別に表面上だけでいい。友達として彼女たちのそばにいられるなら、学校生活が“最悪”になることは避けられる。独りにはなりたくない。友達という関係が少しでもあるならいいんだよ。

そして、少しだけ……いや、かなり腹が立った。柊木くんの友人関係に憧れているからこそだ。嫉妬だって自覚はしている。だけど、現状を打破する勇気なんて私には無い。むしゃくしゃしたまま職員室にノートを提出した。きっと教室着いたら、あの子が私のプリントを写しててそれに嫌な顔しないように接して、柊木くんからは冷たい目で見られるんだろう。そう考えたら教室に帰る足取りが重くなる。

昼休み終了のチャイムが鳴るギリギリに教室に入ると機嫌の悪いあの子が私にプリントを突きつけてきた。

「な、なに？」

驚きつつ、プリントに恐る恐る視線を落とすと私も驚いた。私の回答したはずのシャーペンの形跡が少しもないのだ。

「なんで解いてないって言わないの！？分かってたら他の子に聞いたのに！」

「ご、ごめ……」

「あんたってホントに使えない！友達のピンチも助けられないとか!!」

なんて理不尽なのだろうか。自分が解いてないくせに私に当たるなんて。逆ギレもいいとこ、むしろ清々しい気さえしてくる。まあ無理もない。いつも宿題を人に見せてもらっているから、テストで赤点をとった彼女。授業態度も悪く、提出物で何とか単位をとっていた。だからたった一度でも宿題をやってないというのは非常に危険なのだ。

そう思いつつも、この事態に非常に困惑した。この子の機嫌を損ねたのもそうだが、私は確かに昨日ちゃんと解いてカバンに入れた。答え合わせまで済ませた記憶もあるし、今朝もカバンの中で一度確認している。なのに解いたものではなく白紙のプリントが私のカバンにあったことは理解しがたい。固まっていると、数 A の先生が教室に入ってきた。みんなゾロゾロと席に着き、私もあの子も無言のまま席に着く。今から急いで解けば間に合うか？ あの子に直ぐにプリントを回せば彼女は単位を落とさずに済むかもしれない。 そうしたらまだ彼女たちの近くにいれるのでは無いだろうか。独りにはならない。しかしこの問題数を一瞬で解くなど不可能だ。どうするべきか。そんなことが頭をぐるぐる回っていると、突然プリントを渡された。「え？」驚きつつ、顔を上げると、振り返って私の机に頬杖をつく彼がいた。

「お前のプリントと予備の白紙のプリントを摩り替えたんだよ」

「えっ!？」

彼は少しいたずらっぽく口の端を上げる。

「どうせ、今日もあいつにプリント見せるんだろうと思ったからな。どう考えてもあいつの自業自得、気にしなくていい」

彼の手元には間違いなく、昨日私が解いたプリントが、握られていた。しっかりと答え合わせまで済ませたものだ。

「で、気づいた？」

「な、なにが？」

「あいつはお前のこと都合のいい奴隷程度しか思ってない事」

彼は加えて「ご主人様は奴隷がいないとともに自分の仕事も出来ないんだね」と、慌てて教科書とプリントを交互に見るあの子をちらっと見た。

「でも……私の居場所が無くなるのは困るよ…」私がそう言うと、日直から号令がかかって私と彼は立った。

「友達、いないなら俺のどこ来いよ」

彼はそう言うと着席してから少しこちらを見た。

「え？」

「どの道もうあいつと仲良くするのは無理だろ？お前はあいつと話す度にずっと今日のことが頭に浮かぶと思う」

「…」

「ど？俺らのどこ来る？」

「いい、の？」

「嫌だったら、はなから話しかけねえよ」

「そ、っか。よろしくお願いします……」

私の返事を聞いた彼は満足気に前を見た。今日から私の新しい学校生活が始まる。まぶたの裏に焼き付いた彼らの仲間になれるのだと思うと、あの子からの睨むような視線が全く怖くなかった。

P.N. 桜雨

◆ある短歌からの連想 2



漫画みたいじゃん、と思った。

お隣さんからの「晩御飯作りすぎちゃったんです」に応えるように思った。

「ありがとうございます。いただきます」

「味が好みじゃなければ捨ててくださいね」

頭を傾げながら言うお隣さんにそんなことしないってわかった上で言っているとその時は思った。

簡単に挨拶を済ませて自分だけの部屋に戻る。裸足で灰色のスウェットで襟足が外に跳ねていたことが急に恥ずかしくなった。もう少しだけまともな格好で挨拶すればよかったかもしれない。

受け取った真っ赤な鍋にはカレーが入っていた。鍋をどうやって返すかの話とかをもう少しすればよかったと後悔した。炊飯器を今から稼働させるのはどうにも面倒だったので冷凍していた白米を解凍した。その間に火にかけた鍋ではカレーがぐつぐつと良い音を出していた。カレー皿なんてイケイケのアイテムはたった一人の生活にはないのでなるべく大きな皿を用意する。そこに湯気が立つ二つを混ぜ合わせる。

美味しそう。

実際のところ、とても美味しかった。自炊をしないとは言わないがほとんどその機会はない。白米を炊くことだけ。副菜は適当にスーパーで買ってくる。そんな生活には野菜がごろごろ、ふかふかとしているカレーは妙に染みた。灰色のスウェットもかっ込んだ拍子に数滴味見していた。ちょっとだけ洗濯が面倒だ。面倒との隣り合わせの生活のそのまた隣にはこんな美味しいご飯をくれるお姉さんが住んでいましたとさ。今日はよく眠れそうだ。

結局、カレーと白米の割合が合わず最後にはルーだけを飲んでいた。それでも美味しかった。

※

ゴミ捨て場のネットの絡み方が片手では解決できないことがある。その時にどうしても意地を張って片手で勝負してしまう。

「横着なんですね」

お隣さんが両手を使ってネットを処理してくれた。

「すみません」

その間にゴミを入れる。普段なら雑に投げるところを少しだけ丁寧に入れた。

「昨日のご飯どうでしたか？」

「美味しかったです」

「それは良かったです」

両手を合掌させながら除き込んでくるお隣さんに少しドキドキした。しまった、またスウェットだ。

「最近、なんだか舞い上がってしまっつい作りすぎてしまうんです。もし良ければまた持って行ってもいいですか？」

「まあ、はい。大丈夫す」

初恋の中学生のような受けごたえが自分から出てきた。

「よかったー、ありがとうございます」

「鍋とかどうすればいいですか」

食い気味に聞いた。

「洗わなくても大丈夫なのでうちの前置いてくれたら嬉しいです」

お隣さんは両手を合掌するのが癖なのかもしれない。

それから何度かお隣さんに晩御飯をもらって学食がちょっとだけ物足りなくなった。多分、量だ。量が違う。

今日も今日とてお隣さんにもらった晩御飯を食べる。今日は肉じゃが。じゃがいもに味が染み込んでいて柔らかい。手の込んでいる料理は柔らかいのかもしれない。箸のひとつまみに赤、茶、緑と三色もある。これが豊かさだと心の中で言い切る。

スマホで友人に薦められたテレビドラマを見る。隣に住んでいる年上美女とのラブロマンスだ。ご飯をもらって、いつのまにか一緒に出かけようになって、お互いの部屋を行き来して、それで。

漫画みたいじゃん、と思った。原作は漫画だった。簡単に検索で知ることができた。そういえばなんでお隣さんは毎度毎度作りすぎるのだろう。舞い上がっていて、みたいなことを言っていたがそんなに何度も何度も舞い上がって作ってしまうのだろうか。自炊をしないからわからなかった。その答えは検索しても出てこなかった。

※

「もしよければその鍋差し上げましょうか？」

普段通り、習慣、そんな言葉に落ち着きそうなやりとりの中で不意にそんなことを言われた。

「いや、自炊しないんで。大丈夫です」

特に考えもしないで返答した。

「そうですか。気に入っていた鍋だったので誰かが使ってくれたらと思っていたのですが」

疑問符が頭に浮かぶ。

「捨てるんですか？」

「ええ。彼がもういないだろうって」

何も返答できなかった。

そこからはどんな話をしたか覚えていない。その後ご飯もちゃんと食べたのかわからない。どうやって寝たかも何かした覚えもない。

これ以降、お隣さんからご飯を貰うことはなかった。

一週間はたった頃だった。朝から何か騒がしかった。ゴミの日だと思って慌てて袋に詰め込む。慌ててゴミ捨て場に降りたが思っていたゴミとは違うゴミがたくさん置いてあった。大きめのラック二つ、壁掛け時計、一人用ソファ、テレビ、それから真っ赤な鍋。普通ゴミは一家庭分しかないようでこれを捨てたのが誰だか分かった。自分の部屋に何度かあったものが野晒しになっていることに非日常感を覚えた。一度自分のゴミをその場に置いて両手でネットを解く。すごく効率的で簡単だった。自分のゴミを投げ入れる。ちゃんと入ったことを確認した時お隣さんのゴミに目が行った。どのラベルも二つずつあった。紙パックの飲み物が特に多かった。きっと以前ゴミ捨て場で会った時も同じゴミを持っていた筈だ。それに気が付かず自分がスウェットかどうかを気にしていた。

舞い上がっていたのは自分の方だった。

恥ずかしかった。もう何も映すことのなくなったテレビに映ってしまった自分の顔が鍋くらいに真っ赤だった。

漫画みたいじゃん、とはまだ言えなかった。例のお隣さんの漫画は原作を辿るとハッピーエンドだった。

このくらいが現実。

廃品と書かれた紙がひらひらと風に靡く。乱雑に書かれたその文字はお隣さんのものとは思えなかった。

P.N. ぴゃっぴゃに